

## 〈書評への応答〉

本年報前号（36号）に掲載された翻訳書評に対して、訳者から本号にて応答したいという要望があったため、編集委員会で協議し、以下の応答文を掲載するにいった。

### 『生と死——生命という宇宙』紹介

『生と死——生命という宇宙』（十八世紀叢書第7巻）（中川久定・村上陽一郎責任編集、国書刊行会、全518頁）が2020年9月に刊行された。これにより、18世紀学における重要な著述家でありながら日本で紹介の進んでいなかったシャルル・ボネとグザヴィエ・ビシャの代表的著作および『百科全書』の生と死に関連する項目の、日本で初めての学術的な翻訳とその解説が提供された。

本書については、幸いにも本学会の『年報』第36号の書評欄でも取り上げられた。ただし、その書評では、本書に何が書かれているかということよりも、何が書かれていないかということの方に力点が置かれている。しかも、本書の各所に関して細かく言及がなされる一方で、本書の全体像は示されていない。書籍の細部各所に言及する場合にはとりわけ、読者の理解を助けるためにも全体の概要を示すことが必要であろう。これらの理由により、当該の書評からは本書の全体像と重要点が読者にきちんと伝わらないのではないかと、私たち訳者は強く危惧している。そこで、私たちはみずからそれらを以下に示したいと思う。

まず、『生と死——生命という宇宙』の構成は次のとおりである。

- ・シャルル・ボネ『心理学試論——あるいは、魂の作用、習慣、教育に関する考察』（飯野和夫・沢崎壮宏訳）
- ・マリー・フランソワ・グザヴィエ・ビシャ『生と死の生理学研究（第1部：生の生理学研究）』（小松美彦・金子章予訳）
- ・『百科全書』項目——「死」「生」「生・寿命」（川島慶子訳）
- ・解説：『心理学試論』（沢崎壮宏・飯野和夫）
- ・解説：グザヴィエ・ビシャと『生と死の生理学研究』の歴史的在処（小松美彦）
- ・解説：『百科全書』項目——ふたつの「生」とひとつの「死」について（川島慶子）

以下、ボネ『心理学試論』、ビシャ『生と死の生理学研究』、『百科全書』項目の順に述べていく。

#### 『心理学試論』——人間の「生と死」の生理学ベースの考察

シャルル・ボネ（1720-1793）については、近年「シャルル・ボネ症候群」という医学用語によって、その名を目にする機会が増えている。これは、視力が何らかの原因で後天的に著しく低下した、認知機能に障害をもたない人が経験することのある幻視の症状を指す。この症例を最初に報告したのがボネであり、彼はまたこの症状が現れる仕組みにも言及した。「感覚は本来いくら

かの〔感覚〕繊維の振動に依拠しているが、これらの繊維がその運動を身体の内から受け取るか、外部から受け取るかは、感覚の再生に無関係である。したがって、どのような原因が作用するとしても、完全な覚醒中に感覚繊維が振動させられて、事物や出来事の秩序立った連続を魂に表象するなら、魂は幻覚を抱くことだろう」（『魂の諸能力に関する分析試論』、1760、§ 676. 本書でも訳出）。視覚に対応する脳内の感覚繊維（ないし神経繊維）が、外界からの刺激ではない、なんらかの物理的な原因によって「振動」させられて幻覚を生み出すとされている。こうした考え方は、この症例についての現代の見方と基本的に軌を一にしている。かくして現代の脳科学の淵源に位置するようなボネだが、この繊維の仮説を用いて、いわゆる精神諸機能の分析——ボネ流の「心理学」——を初めて展開したのが『心理学試論』（1754）である。

『心理学試論』は、コンディヤックの『人間認識起源論』（1746）の影響下にあると判断されるが、独自の精神生理学的な観点を有し、『人間認識起源論』とともに18世紀の感覚論哲学を代表する著作となっている。『心理学試論』でボネは、感覚から反省までの魂の諸機能の生成を跡づけ、道徳的な諸法を認識することで魂は理性にいたるとする。その際、「統覚 *aperception*」は「魂が一度にいくつもの観念を現前させる」こととされる（第38章）。統覚についてそれ以上に踏み込んだ分析はなされないが、コンディヤックの『起源論』や『感覚論』（1754）では、そもそも「統覚」という用語は使わずにすまされているのである。

総じて、『心理学試論』では、人間の「生と死」を生理学ベースで実証的に考察する視座が切り拓かれている。これは、たんに「経験」でなく「実験」をベースとする哲学の可能性を教えてくれるという意味でも重要である。数学的自然学をベースとする合理主義的な哲学の18世紀中葉における後退を示し、デカルト以来の「新哲学」の潮流の変化を表していよう。生物の個体の発生をめぐるボネの「前成説」も、やがて19世紀に隆盛となる生命現象への注目の先駆的形態であったともいえよう。なお、ボネは非物質的な精神実体を認めているものの、その哲学の唯物論的傾向は否定しがたく、唯物論的哲学の可能性を教えてくれるものとしてドルバック派の著作と読み比べることもできよう。その一例として、教育を通じて人間の物質的身体に働きかけて習慣を形成し、それを社会全体に波及させることで道徳的な社会を形成しようとする構想がある。

本書の「訳者解説」も参考として、多くの読者が『心理学試論』を味読されるよう期待したい。

## ビシャと『生と死の生理学研究』の歴史的特質

次に、マリー・フランソワ・グザヴィエ・ビシャ（1771-1802）と『生と死の生理学研究』（1800）について略説しよう。

ビシャは、生理学者のみならず、ゲーテ、ヘーゲル、ショーペンハウアー、コントなどにも着目され、多大な影響を広く及ぼした。また、フーコーが『臨床医学の誕生』や『言葉と物』で、知の認識論的断絶をめぐるビシャに焦点を当てたことは、よく知られている。かようなビシャは、1799年から4年間で4種の大著を刊行し、1802年に30歳で夭折した。その2番目の著書が本書『生と死の生理学研究』である。彼の思想と生理学の内実が最もよく現れており、その本文は次の著名な警句から始まるものである。「生命とは死に抗する機能の総体である」。

同書はビシャ自身が宣言しているように、生理学の二大潮流の統合を図ったものである。モンペリエ学派のボルドゥの思弁的な生命論と、ゲッティンゲンのハラーの実験的方法との統合である。このような目標のもとに、ビシャは生命を「有機的生命」（同化機能と異化機能）と「動物的

生命」(知覚機能と運動機能)とに大別し、それらについて多角的に詳解した。そこでは、コンディヤックの分析的方法と、ニュートンの自然把握の仕方の影響が顕著である。ただし、より巨視的に見ると、ビシャと同書の歴史的特質が浮かび上がってくる。

生命観(生理学)の転換は、17世紀の科学革命期ではなく、19世紀の100年近くを通じて生じたと思しい。それは、つまるところ、原因探究から現象探究への認識論的・方法論的な転換である。すなわち、古代ギリシアより、生命現象をもたらす第一原因が探究・措定され、個々具体的な生命現象との関係が論じられてきた。19世紀までの生命観の歴史は、靈魂、自然、熱、アルケウス、生命原理、生命力等々、第一原因の置き換えの歴史といっても過言ではない。それに対して19世紀には、第一原因の探究・措定は斥けられ、探究の対象は現象界内の事物に限定された。そして、この動向の先駆の一人がほかならぬビシャなのであり、その象徴的作品が『生と死の生理学研究』なのである。ビシャは書いている。「悟性に関する近代の形而上学者の学問的方法を動物に関する科学に適用して、第一原因を不問に付し、その大いなる結果だけに目を向けようではないか」。

しかしながら、こうしたビシャの斬新な姿勢は徹底していない。第一原因を不可知として探究の埒外に放逐したものの、やはり不可知なはずの非物質的な第二原因を探究・措定しているのである。このようにビシャには革新性と旧弊性が少なからず併存している。換言するなら、かかる併存に生命観(生理学)の転換の様相が具現しているといえよう。生氣論対機械論の歴史把握にとらわれているかぎり、把握しがたい実相である。

「訳者解説」ならびに小松美彦「科学的生命観の歴史的再構成——ハイデガー生命論の討究のために」(『電子ジャーナル Heidegger-Forum』vol.15〔2021〕所収)も参照いただければ、ビシャの歴史的位置はさらに鮮明になると思われる。ただし、何よりもまず、多くの方々がビシャの当該著作を熟読されることを願うしだいである。

## 『百科全書』における生と死

最後に、『百科全書』(1751-1780)における生と死について語ろう。

本書では『百科全書』中の「死」、「生」という主要項目と、「生」の下位項目である「生・寿命」を訳出した。生死関連の下位項目は他にも複数あるが、そうした項目すべてを概観すると一つのことがはっきりする。それは生を語っても死を切り離せないということだ。生と死の中心にあるのは「死」なのだ。人間は常に死の恐怖に怯えてきた。ただ、啓蒙の世紀はそれ以前と異なり、この恐怖を宗教とは別の方法で鎮めようとした。これらの項目を読むときに目を引くのは、医学や政治算術と結びつけることで、生と死を世俗化し、間接的に教会の権威を弱体化させようとするフィロゾフたちの努力である。彼らは生、老、病、死を生物としての人間の定めと見なす。ここには、ボネやビシャにみられる傾向、生理学をベースに生と死を考えようという傾向がより顕著に表れている。そして内容そのものだけでなく、執筆者たちは、宗教的考察を短く、統計的あるいは臨床的考察を長くすることにより、その主題に割かれる文章の「量」という観点からも『百科全書』の基本精神を提示したのである。

\* \* \*

読者は、518 頁に上る本書を紐解くことにより、生と死にかかわる 18 世紀の作家の真摯な思索の場へと誘われよう。本書はまた、18 世紀思想の研究がさらに広がり、深みを獲得し、この時代の意義が問い直されるための一つの手がかりとなることも期待している。

なお、本書刊行を機に、『週刊読書人』2020 年 11 月 6 日号で、訳者の飯野と小松が紙上対談を行っている。この文章とはまた異なった観点から本書について語っているので参考にさせていただきたい。

訳者（飯野和夫、沢崎壮宏、小松美彦、金子章予、川島慶子）